



ったく与えなかった。

「ご、ごめんなさい」

セレナはささや囁くような声で謝った。目の中の光が弱まりうつ虚ろな気持ちに襲われながら、続けて言った。

「ミスエンジェル、もしも他の人の目が気になって私と距離を置きたいと思ったら、もう私の所に来なくてもいいよ」

「そういう意味じゃないよ...」

ミスエンジェルが言う前に、セレナは階段を駆け下りた。

窓の外は、今にも雨が降ってきそうな暗い空だった。すると、あん じょう案の定、放課後、小雨が